

連作障害対策に飼料用トウモロコシ モデル化図り生産拡大目指す

名取市^{うえまつ}植松地区を拠点とする（農）U. M. A. S. I.（ウマシ）は、令和4年から市内で初となる子実用トウモロコシの栽培に取り組んでいる。

同法人は、平成28年2月に大豆などを生産する「植松機械利用組合」を母体として設立された。平均年齢41歳の役員・社員11名で構成され、水稲60畝、大豆80畝、子実用トウモロコシ10畝を栽培している。

令和6年は初年の約2倍となる平均940kg/10畝を収穫した。代表理事の

大友^{ひろし}寛志さんは「大豆の連作障害に悩まされており、子実用トウモロコシには以前から興味があった。令和3年に県が主催したセミナーを契機に作付けを決意した。雑草対策に優れ、大豆に比べ少ない作業量で収穫できるが、製品の流通や保管設備の不足など課題は多い」と語る。

同法人は、豚糞堆肥・汚泥肥料の活用でコスト削減に取り組むほか、地域への普及活動も行いながら作付面積と生産量の拡大を目指すとしている。

代表理事の大友寛志さん



令和6年のとうもろこし収穫の様子



【記事提供】名取市農業委員会